

心中一枚繪草紙

上之卷

ノルフシすでに。今年の酉も立ち。戌の顔見世朝木戸をあげほの深く提灯の。影きらきらと初霜の。翁の面の。フシにこやかに。ハルフシ始り呼ばふ。聲に引かれてオクリ老も。若いも見る人は餘念なじみに御最眞に。ようお出やつた。ハルフシ朝日影。御代も御國も久方の此の日の本の習はしの。歌を種なる論物の。天地を動かし鬼神を感じしめやかに。妹脊も猛き武夫も。心やはらか饅頭や。菓子に火繩に番附と。賣る聲にまで節こもる竹の紋つく道行の。本を召せく目狭笠小オクリ笠も。預かる預けてござれ。紅絹のくけ紐淺黄紐る。繁昌々々。イヤ此の所繁昌毛氈敷島の。その浪速津の冬籠。フシ今を。春べの顔見世に。ハルフシ日もなが事の。御退屈。地はや今日のお暇と。散し太鼓の下

とよろき明日はとうから唐錦。色どる空は夕陽の山は夕の雲の帯。腰の廻の御用心押すまい。くくく日の入り来る人や歸るさや。花山の幕か袖つやく。貴賤群衆は冬ながら心ぞ。彌生と三夏なりにける。フシ中に家名も。地君が名も世上に高き天満屋の。お島といひて彼の里にお初が後繼かくれなし。此の頃明石の貞と云ふ馴染の客にあげられ。今日は南へ連れて出るいづくはあれど曾根崎の。ゆかりの芝居初様も定めし佛金色の。身上りと聞く外題にひかれ終日見物慰みて。芝居果つれば繋がせし。オクリ屋形に。皆々乗出す。地提重開き封間ども。圖なんと島様今日の山路の道行は。本で語ると直に聞くととは又格別。地大盡様のお慰み船の着くまで道行を。所望々々とどよめ

けはイヤこりやよかろ俺も島の一弟子で。餘程節は覺えたが追付け島をひつ掴み。國へ連れていつたりとも國許は堅い所。こんな遊びはなりがたし此の船中をぶらくと。たゞ行くも愚痴の至り。大阪の名残にちつと聴聞致したし。サア皆つけややと云ひければ供の丁稚が懐中の。本取出してお島に渡し東西々々。圖此の所が山路草刈の道行。地師弟連節東西々々。歌おきに戀路のくまだいろは舟。ほれてほの字の帆が見ゆる。ほの字のく誰に。くほのじのフシはつを花。ハルフシ小蒼白蒼。いはますけ。地此の一叢は刈り残せ。妻ごめの夜の床にせん塙の蟲ともろともに。刈取る鎌の鋭くも聲きりくす響蟲。牛の鞍にも音を鳴きて歸る家路を松蟲や。さらば笹原さぶがにの秋にそめフシ絲くり出し。五百機立てし。機織やその藤袴破るなど。なつか茨のつるさきに。野飼の駒のハルフシやさしくも。故郷の風の北に嘶へて嘶けば。越路の雪の故

郷ごうの空を暮くひてなく犬いぬの。別府べつふの湯本はあれとかや。如何いかにいはんや久方くわうの天津雲井をあまさがり。賤しんの仕業しわざはいつ君が繪えにかくならで思おもひきや。見みしや聞ききしやとばかりに。スエテ草くさも刈かりかね忍しのびかね。フシ涙なみだを。つけて研とぐ鎌かまの砥石といしも。心碎こころつぶけとや。地ち夢ゆめにもかくと白玉はくぎよの玉世たまよの姫ひめは胎内たいないの。まだ見ぬ兒この別れぞと。つれなき母ははに誘いざなはれオオッッ行く道みち筋すぢは多おほけれど笛ふえにさそはれ妻つま戀こひふる。牡鹿うしかの苑えんの法のりの導みちきこれなれや。互たがひにそれと道芝みちしばのフシすがるばかりの戀草こひぐさも。ハキシ芽こゝろはしけりそふ。は。こ草千草くさちぐさ八千草やくせんぐさ。思おもひ草くさ。おそろし鬼おにの醜みにく草くさに。長地ながち隔へつる中の垣根草かきねぐさ力草ちからぐさなく泣なみだきかはす心こころぞ思おもひやられたる。草くさばし刈かりるな笛ふえを吹ふけ。フシ野路ののちみちに二人ふたりが悔くみ草くさ。毒どくの草くさをも身みの上うへと知らぬ手許てぐさの暗くらさには。燈あかり草くさを。歌うたドキ思おもひ出いす。思おもひ出いですやありし夜よの。みだれ逢あひにし枕まくらには鬘まげ草くさをぞ思おもひ出いす。かのほのくくのほのぐららき。黄昏たふし早く寝ねし時は。かやつり草くさを思おもひ出いし。人目ひとめ思おもはで肌はだふれて起たきつまるびつささめして。相撲取すまみ草くさを思おもひ出いす。通路すうじ遠とほきひとり居ゐの。斑女はんぢが闇やみの寂さびしさは茶引ちやく草くさをも思おもひ出いし。心細こころこしや糸薄いとすく。歌うたいいくく風かぜかときげば。山やまの下したには嵐あらし吹ふく。あらし吹ふくさりとは嵐あらし吹ふく。山やまをはなれて風かぜとなりナホス風かぜも昔むかしに。フシ吹ふきかへれ。■イヤ淨瑠璃じやうるり待まちちやくく舟ふねも留とどめい。なんと皆みなは氣きが付つかぬか。先まにから陸くわを見みればうそ汚きたれた八丈はちぢやう縞しまに。花色はないろの羽は織お若荷わがの丸まるの紋もん付つけて。編笠へんがさきたる男おとこめが道頓堀みちとんぼりを乗のり出いすから。此こゝの舟ふねに目めを放はなさす後あとへ下くだれば走はしりつき。先まへ抜ぬければ立留たてどまりりつけて廻まわるは合點あてちんいかず。■ありやくく又またあそここに立たつたるは。喧嘩けんかしかける體ていと見みた黙もくつて居ゐるはひけた事こと。あがつて一つ詰つ開ひらかんと脇差わきざし押お取り出いでんとすれば島引留しまひきどまりめ。■ハテはでな人ひと様さまぢや。わしらがやうなものが乗のつた舟ふねは目めに立たつゆゑ。どれによ限かぎらず皆みな見みさんす。■まななか答こためて一本いっぴんかたけ恥かたじけかこより。ハテ彼方あつちから見るなら。此方こゝちからも見て大様おほさまにして居ゐさんせと。言いへども更さらに聞き入れず駈か上のぼれば續ついて上のぼり。見みればいよく問夫もんぶの男おとここれ市様いちさまと。いはんとせしが目めはじきして。■是こゝは申まをし。此方こゝちは他國たこくのお家いへぢやぞ。所ところの家いへなら粹すまである。何を云いひかけさあんしよと言い譯わけして下くだんすな。■どちらの爲ためにも悪わるいぞと。フシ心こころを揉もむこそ道理ことわりなれ。■貞まことは肘ひじばり遊面あそびめんつくりこりや編笠へんがさ。■五度ごどや三度さんどは休やすまようがどうした事ことに舟ふねにつき。女おんなを乗のりせたる船中ふねなかを見るも大かた方圖かたづらがある。■地ちそれ程ほど見みたくば近くへ寄よつて見みられに來きた。■サア汝おんが存分ぞんぶんに見みけつかれ。見みやうが悪わるいと許ゆるさぬとフシ聲こゑを訛まつて力ちからみける。■地ち市郎右衛門いちらうゑもんもさしあたる意い趣しゆはなけれど當分あたぶんの。妬ねたましさばかりなれば口論くちろんしては如何いかぞと。■イヤ申まをし別わかれにお腹はらの立たつ事ことも存ぞんぜず。我われ等らも下地したち淨瑠璃じやうるり好き折々しりしり積古つみこ仕しるが。此こゝの山路さんじゆの道行みちゆきは戀こひを含こんだ節ふし節ふしなるに。只今ただいまお島

様とやらあそばした淨瑠璃の。節は少しも
變らねども情を御存じない故か。誠の心少
なうて御眞實のない故か。地如何にしても
道行が浮氣に聞えて。底意に戀が御座らぬ
と。フシ片目でお島を睥めにける。調男あ
ざ笑ひヤア吐かすまいく。島が淨瑠璃よ
かれあしかれ。己れが冷にも熱氣にもなる
ことか。どうでも外に様子があらう。但し
又己れがいふ戀をふくんだ淨瑠璃の。語り
様を知つたらば只今爰で語つて見よ。節が
違ふと打握ゑるがサアなんと語らうか。何
何がさて御所望ならば語らいでは。則ち山
路の四段目檢非違使が鹿島の事觸。島様と
つくとお聞きなされ。調是や此方へ御免な
らう是はおしまでも御座らぬ。お鹿島大明
神より罷出でた事觸で御座りや申す。總じ
てお鹿島と申すには上の客が卅三人中の客
が卅三人。拙者がやうな見る影もない粕客
が只た一人。正月七日神前に於ておやおつ
かない誓紙を書くその誓紙の文言に。かや

うに申し交すからは未來までも變るまい嘘
をつくまい隠すまい。勤めの間外に深い男
を持つまいと申す起請を取交すから偽りは
申さないと存じ。盡す程にけるほどに只今
は向脛からでつからない光り物が飛んで出
て。巾着の扉が八文字に開け内の首尾が八
角にわれ。神馬のお馬の幫間にも見捨てら
れ大恥をかい御座ある。されどもお鹿島
大明神氏子を不便とも思召さず。或時は餘
國のだいじんぐうに身請の談合をしかけ。
或は紋目をかづかせひき日の立前後からは
ける禿頭。親里の合力ななどと申して厄介
しつかい蒙古高勾麗の上手ごかしに。むつ
くりとられたとの地御託宣。フシ無上神靈神
道加持。地これが眞實戀のある淨瑠璃。
島様ようお聞きなされいと。フシよそながら
こそ恨みけれ。男は二人が目色を見てはて
扱變つた文句ぢやの。調なんと餘國の大盡
に身請の談合とは珍しい事觸。これお島、
其方は今のが面白からうが此の貞は耳に立

つ。とても所望しかゝるからはまあ一節所
望致さう。地お島とお身とが連節で戀のこ
もつた淨瑠璃を。初段から切まで語りぬか
せにや堪忍せぬと。ごしめ廻ればおしま一
人が氣を苦しむ。調是申しこな様程の粹様
が。是は又氣の通らぬ。彼の人と私とわけ
ある様に見さんしたさうなれど。微塵そん
な事ではない腹立てさんすを面白がつて。
法界格氣に云はんすわいのおとなしうして
サア舟に乗らんせと。手を取れども。聞入
れすいやくおつしやれな。調他國か
ら上つて此の大阪で。妓柄をも握る者が
通例の男と思ふか。地どうでもかうでも聞
かにや置かぬ。語らせぬや置かぬと堪忍せ
ぬ顔つきに。お島は難儀手に汗握りこれ。
こゝな人も誰か知らぬが餘程な。勤する身
が客に引かれ芝居へ往つたら珍しいか。舟
に乗るが不思議な淨瑠璃は其方より私か
よう覺えて居る。晩に此方の見世へおじや
よう合點のいくやうに。教へてやらうと世

話やけども市郎右衛門も云ひかゝり。いや
く此方に習はいでも。此方の胸中にある

淨瑠璃は。此の鼻が覺えて居るお聞きやれ
と。扇を打つて。扱もますらが此の目の玉

ぐつと抜出て花人親王の。蜷川の御所の體
とつく見え届け候へば。眞野の長者同然

の大銀遣に思はれて。金銀小袖をして貰ひ
深い男を振捨て。登り結めて擧句には姫君

を請出すとて。地料理献立表がへ眞最中と
見て候。二人が中へ某が毒氣を吹込み男と

女と不和になし。同志戦の口舌をさせば姫
君は見放され。端々の闇屋へさがり後には

濱の納屋のかけ。一本立にて候と。フシ語
りけるこそ不思議なれ。なんと此の節に

違ひがあるかと云ひければ。チ、よい推量
追付け島を請けて見せう。地なんほせいで

も張合うても銀で語る淨瑠璃は。ちつと喉
につまらうぞこりやは見よと。お島にしつ

かと抱き付きなんと腹が立つかと云へば。
又扇の拍子を打つて。不思議やますらが行

ふ魔法の形。天井に現れ出で。異形は手を
のべ檢非違使が眉合を。割れてのけとはた

と打つ。ハア、拍子にかかつて齧相々々。
ヤア己れ撲つたぞよ。もうきかぬと立上る

地お島は縫つてなう情なや。是わしが詫事
ぢやエ、供の衆氣が利かぬ。船頭衆頼みま

す舟に乗せて下んせと。泣き叫べば地人々
は折も悪し場も悪し。是非御堪忍くくと。

無體に舟に抱き乗せ。フシ權をはやめて漕出
す。地なほ船中より聲を上げ銀も持たいで

云はれざる。戀の意氣地の淨瑠璃だて身が
前では置いてくれおけくおけやと。船端

たゝき手をたゝきフシ笑うて舟は上りけり。
地市郎右衛門あたりを見廻しハア我ながらし

どもなや。氣が違うたか南無三寶一期と思
ふ女房を我が物顔の醜さに。苛つは戀の癖

なれども思へば口惜しかうせいでも。三久
では彼の面をうつけた事と思ひやせん。島

が心の。フシ恥かしや。氣遣ひかけし可愛や
と。見送るかたもほのくくと明石の客の乗

る舟に。お島もかくれ島隠れ蜷。川へと三重
こがれ行く。フシその名は云はじ。地名を

問へば父は長柄の田地持。市郎右衛門が弟
善次郎なれど悪性者。人の意見も馬の耳よ

そ吹く風のぶうくにて。夜歩き日歩きと
ほしたて歸れば小宿で衣裳をしかへ。かせ

ぐ體をば親兄に。これみやの前大根を。フシ
荷うて家路に戻りける。地かゝる所へ下男

つかくと寄つて棒鼻取り。同申し善様。
これお見忘れなされたか毛馬屋の七兵衛。

エ、お前は譚の悪い。衛に依つて待てなら
ば待つまいものでもなければども。幾時か幾

際か今日遣らう明日遣らう。假初ながら五
百目餘り五匁も埒あかず。それに昨夕も隣

までお出でなされ。此方へは音信なしあん
まりななされ様。今日は親御様へ直に申し

て取つて来いと旦那が申し付けました。地
断りましたと入る所を引留めて。こりや聞

えぬ日頃の己ぢや知らぬかい。五百目や一

中之巻

貫目今でもやるは合點なれど。親父が手前をあぢにして末長う出よう爲。少しの銀を延引した。そちが差配で二三百どうぞ頼む。ヤアいつやらの紙花も。思ひの外におそなはり。地面目ない。是も拂ひと一度にやる。今改めてこりやばつと打ち直すわと。捻つて出せし鼻紙のフシしらかしこそ笑止なれ。地所へ駕籠の長介来り。私に請合の菱屋の花代津の國屋の料理代。合せて三百四十五匁六分。扱もくせがまれます。其の上お前は恃もない花車や娘仲居に迄。仕着をして取らせうと約束ばかりで參らぬ故。私が宙でも取つたかと毎日毎夜の使立て。内は常住師走にて何とも迷惑仕る今日は是非に請取りませう。それにならずは親且那へ訴訟申すと。地云ふ所へ。五十餘りの女房綿帽子にて顔包み。編笠島の笹屋の嗚で御座んする。御人體とも覺えませぬ我等が僅のあきなひの。元手も利喰の月をどる泥鰌汁の集禮代。取切る間は何處

までも着きまつる、藤の棚。谷町からと云ふもあり九軒の駕屋が揚錢の。残りも今日はすつきりと取つて九兩二分の銀。道頓堀の水茶屋の。或は鱧鈍けんどんのフシネばで聞くさへ笑止なり。地善次郎もてあつかひ尤も掛は負うたれども。節季でもあることか月ともない今日にかぎり。此の様にせがむのはム、合點ぢやく。兄市郎右衛門のうつけ者。天満屋のお島にがらりと片鼻打明けて。親父の機嫌さんくにて半勘當の身となつた。それを聞いて我迄を氣遣ふと見えたり。地兄とは格別こんな銀わけ悪うする男でない。親父にいふなら云うて見や一文にもなるまいが。遅うて此の月一ぱいに濟すと云ふから嘘はない。十三國島北南の長柄で男といはれたる。善次郎ぢやが何と見た。地僅か二貫目内外で捨てる善次が名ではない。親父に云うて此の善次を勘當させて腹癒るか。但しは自然に銀とるか勝手次第と投出し。地立派に云へば掛

乞どもいかなれ嘘は長柄川。砂にはよもやなるまいぞと。いく日くの日切りしてオッリ皆々宿所に歸りける。地親介右衛門は六十餘り頭に積るお霜月。講中お茶所の冥加錢残らず爰に持集りお勤過ぐれば表に出で介右衛門云ひけるは。何れも講中有難いと思召せ。毎年のお霜月懈怠もなう上ぐる事。自力では叶はず御恩德のお蔭なり。扱去年の通り此の銀を。兄市郎右衛門に持たせて京へやる筈なるが在所で沙汰も聞かれつらん新地狂ひに身代あげ。方々の借錢堤際の田地をも。七百目の質に入れ四貫目の手形したと聞く。かうした性になるから一錢も持たされず。あの弟めは一日でも居らねば年貢の埒あかず。身どもが上りませうといへば弟は律義な顔つくり。大儀ながらさうなされ。地ア、いづれも性のよい兄貴にて。年よられて親父の苦勞で御座ると云ひければ。それは興がる今聞いたとフ頭を振り顔をしかめける。地介右衛門重

ねて白銀五百目二包。小判廿五兩一步合せ
て四十切。改めて預つたと數よみ揃へ懐中
より。掛硯の鍵出し抽出あけて。金銀取入
れ錠おろし。フシ錠を袋に入れにける。地時
に表へ駕籠の者頼みませうと云ひければ。

どれいというて妹のお吉何處からの使とい
ふ。御私は蜷川天満屋のお島様より。市郎
右衛門様へ急な使に参つたり。此の文進
せて下されませと高聲に云ひければ。ア、
こゝな人高い聲さつしやんな。地兄様は昨
夕からまだ歸られず。私が預り届けませう。

お歸り次第頼みますると。フシ言ひ捨て、こ
そ歸りけれ。地介右衛門聞付けてお吉今の
はなんぢや。御イヤなんでも御座りませぬ。
なんでもないと己れ等まで二つになつて。

地親の目を抜き居るか。文捻ぢたくつて
はいづれも。御田地賣らせた女めが市様ま
るる身よりとは。はて扱々あたじたゝるい。
皆の手前も面目ない。地まて己れどうする
と。鼻紙袋へ文をも入れ。ぐる／＼まきに

紙捻より。細きお島と一命のフシ終るはし

とぞなりにける。地講中も挨拶なく男の子

は何處もそれ。先づお暇申しませう。なん

と太郎兵衛若い衆が妓々と云ふ程に。どう

した事と思つたが田地を賣つて買ふ故に。

それでお山を米といふ。今講釋が聞えた。

堅い輕口言うて歸れば。介右衛門も苦笑ひ

オクリ奥の間にこそ入りにけれ。地善次郎

は只一人外の事は耳にも入らず。一心不亂

に掛硯の銀に性根を奪はれて。そろりと立

つて錠前を。押して見引いて見捻ぢて見て

奥を覗き表を見。箱口取つて持ちあげれば

顛うてどうど打落し。我とおびえて飛び上

り。種々様々に盗みやうオクリ工夫するこ

そ恐ろしき。地ヤア忝い錠の入つたる鼻紙

入親父が忘れ置かれたり。引解き錠取出し

まんまと明けて。錠はもとの紙入に初めの

如く納め置き。掛硯の抽出明け二包の白銀

を。下懐へ押込んで小判は頭巾にぐわら

りと入れ。裸一步を手に握れば奥より親の

聲として。善次。／＼と呼びかくる。あい

といへども此の一步。置所に動轉して口へ

入れたり目へ入れたたり。うろたへ廻つて釜

の上なる御酒徳利へ。さら／＼と移し入れ

フシ親の前へぞ出でにける。地かゝる所に市

郎右衛門内へ歸れど敷居高く。心置かる、

家來まで何れも野畑へ出でたれば。誰に首

尾問ふ便りもなく上り口にとほんとして。

寒さは寒し酒一つと膳棚さがせと酒もなし。

ヤア荒神の御酒がある冷でも一つ戴いて。

胸のもや／＼晴さんと。茶碗引寄せつぎけ

ればこりやどうぢや。酒の中より壹歩が湧

く寶の泉が有難いと。皆打明けて是は夢か

現か。三寶荒神の御利生か死したる母のお

授けかと。嬉しいやら怖いやら分別に能は

ねども。久々で金氣にあうた先づ目出たう

登歩の上汗吸ひませうと。戴き／＼ぐつと

飲み壹歩を紙に押包み。フシ懐に納めける。

地黄金は人の身を富ます寶なれども此の身

には。命を刻む刃となる善悪こそは哀れな

れ。■所へ善次ひよつと出でヤア兄ちや人お歸りか。推參な御意見なれどもお身持ちがさうでない。親父も機嫌さんぐの上親川のどこからやら。悪い所へ文が来て親父が見付け。■地それそこな鼻紙袋に入れ置かれた。我等は南の御堂へ親父の使に參るなり。後で首尾ようなされと云へば市郎右衛門は肝潰し。是はと呆れ居る中に善次はそつと後手に。御酒徳利を隠し取り表に出て押戴き。一散に駈出でし。■地心の内こそ可笑しけれ。■地かくとも知らず市郎右衛門つねぐ不和なる弟の。さすが恩愛なればこそよくも知らせて有りけると。鼻紙袋の紐を解き文を搜す所へ。■親つかくと出で後に立つて。それは何する市郎右衛門。■地はつと驚き飛びしさり差腑。向いてぞ居たりける。■地介右衛門聲を上げ。己れは天魔が魅入れたか佛罰が當つたか。餘の悪性は若い者あらう事とも云はれうが。あれ掛覗の口明いたり。■地鍵を入れたる鼻紙袋あけて

我に見つけられ。仰天するは盗人な。身が銀ならば親の慈悲沙汰なしにもしてやらう。身の油にて講中が。御開山へ奉るお茶所の銀ぢや盗人め。■地一文一字違うても己れが生けて置かれうか。我等一人は縁者の證據それそれ講中組中と。呼ばはる聲に向ひ隣。一在所が駈け集り。■地外様の證議ぞ是非もなき。■地介右衛門大きにせきサア何れもの目の前で。掛覗を開かんと抽出見れども金銀は。壹錢とてもなかりけり介右衛門地蔵踏み。涙を流いてエ、口惜しや。何代か此の家うちに小言のあつた例よめもなし。歳六十に及んで一在所と云ひ講中の。大口小口うごかする己ればかりが恥と思ふか。盗人を捕へて見れば我が子なり。此の中間で是程のよい事をしたならば。親の身ではどれ程の自慢であらうと思ふぞやれ。成人の子を持ってば親の心安めぞと人も云ふに己れには。寢た間も心安からず鼻句にかゝる大事を仕出す。内でかうした心からは外で何がな仕置や己れが寢心に養子と云ふ事知るならば。

眞の親ならかうあるまいと我々夫婦を疎みやせんと。義理もあり不便もあり殊に母が最期にも。調弟より彼の兄を繼母にかけてくれるなど。云うて死んだは小耳にも定めて覚えて居らうぞや。地仁義も慾も身の上も本子には忘るゝに。その本子より己れをば大切にせしかひもなく。湯を沸かして水入らずの親の内で盗みをする。是は如何なる性根ぞと聲を上げて泣きけれども。子は覺えなき事ながら言譯もなきしだらとなり。親も道理子も道理。心にこもる哀れさの二人の。涙せきあへず。地エ、とかういふも恥の恥。勘當ちや出てうせう。親子名残りのかたみの杖。身に覺えよと押取つて。さんぐに打ちければ杖は中よりふつと折るゝ。飛びかゝつて踏む所を。妹と下人すがり付きオクリ泣くく奥へぞフシ入りにける。地市郎右衛門涙をばらくと流し。調何も申す事はなし。地親ならぬ親子ならぬ子。眞實の親子にも勝つたる御恩徳。い

つか報じ申すべき。とくにもかやうに承らば如何様とも孝行の。盡し様もあるべきに口惜しさよ後悔さよ。産みの親は見す知らず。養ひ親にはフシ不孝をなし。地此の市郎右衛門めは親の罰が當つたり。せめて心の念願にて死して再び親子と生れ。今の御恩を報じたきその印。此の杖の片折を未來の形見と押戴き。調如何に講中組中も今生の暇乞ひ。地頼み申すは親の事。孝行つくせと妹に傳へてたべ。死するとあらば御回向も頼み申すと置ききも。涙ながら餘所ながら見おきながらの橋柱朽ち行く身こそ引三重哀れなり。フシ逢ひそめし。一夜を戀の水の上に。三夜四夜五夜十夜百夜小オクリ通ひ。車の蜷川變る瀬枕沈む淵。思ひ二つのフシ中町や。フシ更けて苦む。待宵に。明るるわびしき別れ路のフシうきを接木の。梅田橋フシうめて冷せと。色茶屋 フシの色の。出花の。フシ里ぞとはさめぬ花香を。フシ汲みて知れ。

下之卷

地實にや士農工商の。品かすくの其の中に情で賣れば情で買ふ。歌人評判つけおきし。よき衣着たる商人もオクリ誠を守るフシ天満屋の。地亭主は外より歸りしが。調なんと女子供は仕舞うたか。島は今宵はどうしたと云へば。島は今宵は長柄の市様として。馴染のお客が久し振りで近江屋迄見えまして。それで島様も近江屋へ送りましたと云ひければ。扱こそくさうあらう。今宵丸屋の謠譚に往つたれば。町衆の話に長柄の市郎右衛門といふ人。報恩講の金を盗み親の勘當うけて。白晝に在所を追拂はれた。是も此方の島故ぢやと女夫池で聞いて來て、知らぬかと云はるゝ故とつかはして戻つた。地前のお初にこり果てた家名の出るも迷惑。客を倒すがみめではない商せいで大事ない。それ早う呼びにやれと喚きちらせば女房も。エ、皆も氣がつかぬ此方に云はるゝ事かいの。又淨瑠璃に乗しやんなや。早う連れて戻りやいのとフシ女心のせはくし。

地譜代の下女は門より入り。市様はお馴染

故やるは私がやりましたが。勘當ともふん

ど、とも知つたら何のやりませう。編たつ

た今も近江屋へ行て見れば。島様はきつう

酔うて居さんして何を言うても譯がない。

地そんな事なら戻しませうお初様の彼の夜

さり地二階の梯子を踏外しおれが胴骨踏ま

んした。地形見の痛さがやうやうと此の頃

やんだに勿體なや。また踏まれてはならぬ

ぞと、フシ駈出してこそ走りけれ。地かくて

弟の善次郎は兄に負うせて銀盗み。所々の

びらくらを仕舞はんと。此の所へ來りしが

お島は酒に酔ひくづをれ。ひよろりと

なまになり近江屋出でて濱筋や。今宵一つ

に三途川越えんと思ひ詰めたれば。心には

たと戸をたつる風呂屋の前にて善次に逢ふ。

ひらりと外すをちらりと見て。これ善次様

善次様手が悪いと。よろくとすがりつい

て。地こなさんな聞えやせんぞえ。前はさ

いゝごあんして何が怖うて逃げさんす。

これ兄嫁の島ぢやいな。たつた今迄近江屋

で兄さんと逢うて居て。今日の様子を聞き

やした。大事の俺が男が勘當うけて御座ん

したりや。胸が痛うてちつとの酒で舌がま

はらぬ。こなさんは弟の身で羨や機嫌がよ

ささうな。禮いふ事がある御座んせと。地

胸ぐら取つて引いて行く。善次は何れも頼

みます。頼みますると仰向に反り。引摺ら

るれば下女男是は島様何ぞいの。サア内

ぢや這入らんせと無理無體に押入るれば。

上り口にひよろくと。片身をとんと横に

投げ、フシ水たもやとて伏しにける。地夜こ

そ更くれと一町の行燈しまへば天満屋の。

締たる門口暗闇に善次は島が心根の。恐し

ければ格子の蔭、フシ身を引きそばめ立聞き

す。地市郎右衛門は近江屋の目目にせかれ

しかなくと。死際の契約せず便もがなと門

に立ち。弟ありとも知らざれば弟は兄があ

るとも知らず。傾く月に東向き暗き格子を

隔てにて。内の様をぞ聞きにける。地亭主

夫婦是を見て。島はいかう酔うたさうな。

是いて休みや。お島。地お島と茶を汲んで一

つ呑みやと云ひければ。地あいゝこりや

忝いと頂きて。ほんに誠にお主たる身が勿

體ない大事にかけて下さんす是を思へば勤

の身が心中などで死ぬるのは。お主へ對し

て不躰。損をかけるは身の罪科。地さりな

がら死んだ者が生返りその入譯を云ふにこ

そ。命に代へるものはない夫を捨て、身を

果すは。いふに云はれぬ詰つた事憎まう

者でも御座んせぬ。地かう云うて私が心中

する氣はなけれども。爰にも前の初様に手

懲の事もある故に。こりや前書の話ぞや私

が馴染の市様の勘當は。弟御の無費の難を

身にかづき。所の住居もならぬとよ。これ

はなんたる腑慾ぞやわしらが今の此の勤。

伊達にも派手にも身の爲でも一日片時な

事か。親兄弟の、フシいとしさ故。面白から

ぬ勤をも辛いと一度云ひやらぬは。地親兄に

苦をかけまい爲。地かほど大事の親里の。

貧苦を助けしお主なれば。御恩は更に忘れぬども。生身は死身殊に又此の頃酒にあてらるゝ。地もし頓死でも致しなば下された茶が末期の水と。くだまく體に紛らかしわつとばかりに泳へかね。しやくり上げたる澄上戸と人目に見せし下心。市郎右衛門は忍び泣き弟は身の悪願で。恥ぢて悲しむ悔み泣き。心は三つに變れども同じ涙に。くもる月。フシ時雨の。闇の本意なさよ。地人影見てや町内の犬吠えわたれば兄弟は。見付けられては悪しかりなんと。フシ西東へぞ逃去りける。地亭主夫婦は氣も付かずくだをまかずと早う寝や。皆々仕舞へと云ひければあいと答へて箱梯子。上りかゝつてコレ旦那様内儀様。みんなさらばやくくとフシ言捨て二階に上りける。下女は見上げてハテ小氣味の悪い聲つきぢや。長兵衛門もよう締めやや。有明の消えぬやうに油もたんと注いでたも。消えても此方は火は打たぬ。地俺には火打が禁物ぢや。打つ音聞

いてぞつとするとオクリ咳きへてこそ臥しに力なき。彼奴追掛けて討つて棄てんいやいや見苦し。最期の邪魔と心をしづめ小聲に歸り。軒の下にてしはぶけばお島は夫ぞとなり。サア夜明も近づく人立あり一所と思つべき様もなく。柄付の鏡差出し星影映してひらめかし。爰にあるとぞ知らせける夫も心得扇を抜き。聲立てられねば金物の光り合圖ぞや。追付け待つと云ひければ合點りに物を云はせては。招き合ひく我と我が身を抱き締めて。齒をくひつめて嘆きける。フシ深き思ひぞあぢきなき。地弟の善次郎島が詞に發起して。悪心を翻へし兄の命を助けんと。此處彼處と尋ね歩きもとの格子に走り付く。兄は人ぞと立隠るれば善次郎門叩き。調長柄の市郎右衛門は是には居られ申さぬか。近江屋にて尋ねればはや歸られたと申さるゝ。地御存じないかと呼ばはりける内よりは喧しい。夜更まはつてそんな人は知らぬと云へば。南無三寶と走り行く斯くと心を語りなば。死なで止みなん百人の數オクリとる。歌たびに繰りつくす命。二人の命隔て疑ふ因果と因果。定まる業ぞ二つを。數珠二聯これが。冥途のフシ迎

血死期の道行

心は 三重

鐘々、キ死神の。導く道や野蠍の。はかなき

蟲もたま〜は。朝の露に生きのこる。それよりもなほ。あだくらべ。これを限りと

百八の數オクリとる。歌たびに繰りつくす命。

二つを。數珠二聯これが。冥途のフシ迎

ひぞや。フシ送る軒と。見返る野邊と。なかに飛びかふ夜這星。行いて歸らば言傳てん。出でて歸らぬ魂の。地あこがれ添ふとは知らねども。そばに夫のある心。木夫はお島と連れ立ちて歩む心のともすれば。目にちら／＼と幻のこはその人か。ソキまことかと。木夫抱きつけばあだし野や風ほう／＼たる閨の戸に。ワキどれ市様は。木夫お島はと。尋ぬる袖に降る涙。フシ夜半の時雨となりにけり。フシこれこそ曾根崎。天神の。地松と棕櫚との連理の森。かき集めたる言の葉のよそに聞きしも今は又よそに嵐の身にぞしむ。お島も同じ我が庵は。歌お初徳兵衛のその嘆の。夢もやぶれてまだまもないに心中宿世の報の業か。そのみならず親方や。親の苦勞と思ひは知れど男死なせて見て居られうか。女房先立て存らへあらば。そりや犬猫も同じ事。同じ中にも鹿となり。フシ鴛鴦と生れて女夫池。生ける間もなく身を果し猶や藻屑に埋まんと。

また只管のうき涙。スエテ落ちて三途の川となる。木夫フシをとこ。心もくれ果てて。地西か東か何處ぞと月に向へどわが影の。映らざるこそ不思議なれ。ワキ女も向ふ燈火の。壁にも窓にも障子にも我が影見えぬ怪しさよ。木夫ア、あぢきなや果敢なやなまことや人の物語に。死する時節は人魂飛んでその身の影の無きと聞く。さぞやお島も。ワキ市様も。かくぞ最期の近づくと。二人合圖の數珠の念佛の。一萬遍も繰りつめてフシ九千遍にぞはやなりぬ。ハルフシ心細くも。便なや今千遍の命の内と思へど。我が身は思はずさきには如何いかにぞと。案じかはせる互の形。フシ茫然とこそ現れければ。夢か現か空蟬のもぬけの魂とも。知らばこそ。こは何として何時の間に一所に死なん嬉しやと。もつれ取付け縋りあひ誠の形影の人。歎けば歎き泣けば泣き。戀にせぐりの玉の緒のおのが思ひに手繰られて。一里の道は隔たれど。フシ鏡に映す如くなり。

月は白みて曉のあれ明星もさし昇る。近づき最期一筋に一つ連と願へども。思へば思へば我が身の科養子の親には疎るる。誠の親のありとても親知らず子知らず。假令其途で逢うたりとて何をしるしに誰をか見ん。悪業深き我が身やと。フシ聲を。上げてぞ泣き居たる。地お島が心の嘆には。一人の母の老の世にいつかお主が年あきて。せめて一日片時なりとも湯水とられて往生せんと。これのみ一つの願なりしに。病で死するは是非もなしといはしや母様の。調薬飲めませよ身養生して勤めよと。地大事にかけて下されし此の身體をば血に染めて。明日は堀江へ使たぢ呼び寄せ母の目に見せば。死入るやうの嘆の顔今見るやうで聞くやうで。思ひすごしの胸の中。五體の涙しめ寄せてフシ手にも。袖にもせきあまり。フシ張る。瀧に異らず。爰にくゆるは葎原よあれにふすほる梅田の墓。餘所の無常の煙を見るも明日は我が身もいつくの雲。いつくの煙と

フシ立昇り。誰に此の骨。拾はれん。冥途は六ツの巷ぞや。迷はぬしるべあの煙の消えざる内に我々もと。夫が脇差抜く形島がまほろし後れじと。用意の剃刀よこたへて。

サア只今ぞ一足も早かるな遅かるな。手に手を取らんと思へどもまだ死んで見ぬ死出の旅。連れ立てうやら連れまいやら逢はうやら逢ふまいやら。再び生きて生顔を見るは此の世の限りかと。物をも云はず面影の顔ををしをく見合せて。スエテわつと消入り泣き居たり。地ヤア後れるな後れませぬ。

合點か合點ぢや。南無阿彌陀佛を忘れまい。南無阿彌陀佛と喉吠に。がばと突立て兩手をかけて。くるりと抉ぐれば兩方のフシ面影消えてなかりけり。無慚や二人は半死男は女の姿を尋ね。女は市様々々。とのつ返しつ苦しみの。眩む眼に手を伸べてオクリ尋ね迷ふぞフシ不便なる。地遂に息切斷の經絡六脈絶えぬに。息の通ひ路ふつと切れうんとはかりを此の世の名残。

いざよふ月の朝霜と。フシ一度に命は絶えてけり。弟善次は川端に捨てし衣裳と書を。拾ひ驚き断付けて見ればあへなく事切れたり。南無三寶と嘆けども詮なしかひうけにける。なし面目なし。せめて兄の報恩と。恥も。身體も衣裳につみ負うて一先づ立退きける。扱こそ世上に此の男死んだ風説死なぬ沙汰。生死二枚の繪草紙に戀路の。回向を

右之本令吟覽頌句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

重而予以著述之本令校合候
畢全可爲正本者歟

竹本筑後縁

竹本
敬博

近松門左衛門

信盛
花押

正本屋山本九兵衛版

大阪高麗橋登丁目

山本九右衛門版